

正常な世界に潜む影

岩手県立久慈東高等学校

二年

清水畑

彩花

世の中には普通であることに固執する人間
 がいる。自分の固定概念を他人に押し付け、
 普通ではない人間を毛嫌いし、徹底的に排除
 しようとする。これが私たちの生きる社会で
 はあたりまえになりつつある。物語に登場す
 る主人公恵子も普通ではない人間というレッ
 テルを貼られて生きていく。

コンビニ

コンビニ店員として働く前から彼女は少し
 奇妙な人間だといわれて生きてきた。幼い頃
 死んだ小鳥を見て、お父さんが焼き鳥好き
 だから食べばよう^いと言^うたり、男の子たちの
 喧嘩を止めるためにスコップで頭を思い切り
 殴^つたりと、普通ではない言動を繰り返す。
 しかし、そのことに頭を悩ませる両親を見て
 彼女は自分というものを閉ざしてしま^う。自
 分の色は持^つていても、その色を出すこ^とは
 しない。もし出してしま^えばすぐに世の中か

ら排除されるだろう。そうならないよう、コ
ンビニという社会に依存し、正しい色に染ま
ろうとする。彼女がマニユアル通りに働くこ
とにより、完璧なコンビニ店員になることは
できる。しかしコンビニという世界から一歩
出てしまえばマニユアルなんてものは存在し
ない。そのため、同僚の喋り方をトレースし、
怒りという感情を持っていないのにも関わら
ず周囲の人間に合わせて怒り、服装までも同
僚や友達の真似をする。普通の人間になるた
め周囲から学び取ろうとする姿は、一見素直
で健気なようにも思える。正常な世界はと
ても強力だから、異物は静かに削除される。
全うでない人間は処理されていく。彼女はそ
ういい、異物としてみなされないよう、正し
い色に染まっていたのだ。
しかし、合理的、合理的、という割に彼女
はかなり不器用な人間であり、コンビニとい
う世界から一歩離れ、プライベートな会話を
すると途端にボロが出てしまう。私はこのシ

ーンがおかしくて彼女にも本来の色が残って
 いることに少しほっとした。コンビニで働き
 続ける理由や、恋愛、結婚をしない理由なん
 て言い訳はいくらでもあるだろう。しかし彼
 女は、身体が弱くて、の一点張り。想像力が
 欠けているところや、嘘をつくのが苦手なと
 ころは彼女のかわいさであり、応援したくな
 る存在に映る。
 そんな世界観で生きる彼女を、普通の世界
 に引き込もうと白羽という男が現れる。しか
 し、彼に何を言われても彼女は自分の信念を
 曲げようとほしめない。彼女は何も変わらなか
 ったのだ。だが間違いない。周りの人間の態度
 は変わった。十八年間働いたコンビニを辞め
 ること、男と同棲していることを周りに伝え
 ると彼女が普通の人間になっただとみんなが喜
 んだ。私は少しゾッとした。それは誰も彼女
 の生き方を認めないな。ただと気づいた
 からだ。誰もが彼女の生き方を否定し、彼女
 だけが異物だと決めつけられていたことに私

はとも悲しくなつた。
作者はこの物語で、普通とは何か、正常とは何かについて考えて欲しかつたのだと思う。
主人公の恵子は現実世界において極端な例だ
と思ふ。だが、世の中には普通でないことを
隠している人間も多く存在すると思ふ。その
個性と普通の出し入れのうまさにより、社会
に認められるか認められないかの違いだと思
ふ。そういう意味で考えると普通ではない人
が生きづらいのではなく、出し入れが下手な
人、普通を装えない不器用さを持つた人が、
生きにくいのではないかと思つた。
中学校の時、私のクラスには少し変わつて
いて、友達とうまく関われず、周囲から孤立
している子がいた。しかし、高校に入つてか
ら、新しい友達ができ、毎日楽しそうだと
う話を耳にした。私はそれを聞き、とても安
心した。その子も普通を装えない不器用さが
あつたのかもしれない。だが、不安を抱えた
まま生きていくのではなく、自分を受け入れ

てくれる人を求める勇気があつたのだと思う。
私は、この本を読んだ時、初めは恵子の考
えが理解できず、不気味に思つた。でも最初
に感じた「気持ち悪い」という気持ちがこの
物語の中での人間が考えることなのだろうと
思つた。普通からずれているとおかしい人と
一線を引かれる。確かにそれは白羽がよく口
にする縄文時代というものから変わつていな
いかもしれない。みんなが考える普通が正解
でそれ以外はおかしい。異物として排除され



る。確かにこの世界はこうやって回つてい
ているのだと思つた。
それでも私たちはこの世界で生きていかな
くてはならない。恵子や白羽のように自分の
世界にこもつた生き方ではなく、自分の居場
所を求めぬる勇気と強さを持たなければいけな
いと私は感じた。